教仏

繪本四季物語

後編

四

913.5
工
後編 4

報仇四季物語後編巻之四

遠州日阪住於浪花耶人亭　栗杖亭鬼卯著

東武慶士遊浪速客舎之日　山東京山校

第十七齣

高麗四郎おやめと娶と斗
嵐山婚姻成あらそふ

平塚高麗四郎は。武蔵源左夫よ。孫成。組。道長卿に
召の装束成。奪ハせ。孫紅と斗。ふ。東よわ。しうち
付者しとも。志。まず。源左夫成。殺し。右大臣の装束と盗
立退しと。なて。力成。しるが。鹿井成。宿女とる。禁
裏に入込せんと。さるぐ。勿むまども。彼和成。魂ゑまど。

一膳飯を食ひ終るを待て玄号の下ふ丁る車の前
金せ丁掃を出バし。聟川出あり。四花蓋の鞦付る
たまひし事ハ忘たまへまゝ。今日ハうあやゝ聟
とうつ。不自由とさとる事ふハあ丁ば。安んしたまへと
聟無よ。在家へ付しあゝ。毋い其人とゝていうさ
ま娘共十一歳のに。ま源を主ま及。平塚る羅に行。玄
人成聟ふるし。両人の内いづれとも送らんと。掃
と用世成名紹せ丁とのあ付るまゝど。其聟どの。四も
わ丁ず。弟よまいは男の通人よ丁ゝ。お果たまゝ。

何成他掘よ聟どのとゝをべき。他掘あらバ出し。
といよ。ま。ま葉に行。打ゝ。るはど去の一玄婦
井ハ。相勘金沢百俵長者の伴に勧め。不四義ふ
めぐり合たまゝども。出家の至をあまバ。付ゝ妹
あやめと。孫を組ゝ。よと。列系ゝ送丁し。丁る車
お掃成かへ丁たり。出家の至をある去と。至に
ともいとまゝず。其掃を文名今名ふあり。こまを
えらまゝよと。文出セバ。菖蒲ゝ。紅葉ゝ名ふ
さ丁掃と用合ゝふ。す名遠いねバ。毋ふもえセ

とていえもの家まよやと恨べい。母頭とうぶ。此
掛い遠るゝれども。其源を尋引出ふやらを
たる。四元蓋の綱。其方よりるゝ。まと絡掛
お祝えとせやさん。其月毋が此せうらくと
つよ。ら葉四郎おひる面哉し。其月毋い蓋
中よ盤井ふかへし。其盤井い絹根ゝてふを
たきべ。是よこやら面若もなく。指うつぶきるゝ
ふへ嵐山七之弟。盤井佐とも毋妹のあり家と
方くと尋。やうしに後小路と寸お連て来を

是しゞ内の人名よやうをを何ゞよ。盤井母子く
あまゝて面倒やうせし。平塚高葉四郎小結。
おい妹我女房よせんと来しおるらん。奴ま面
舎して悪うるんとつよ。七之弟お延きぬをの
是て寸及びし係級の棟梁。門とらへて徐義せん。
去るゞ行の子細もきうず。踏西ん。あしかるんと。
根子何ゞよ。母毋の返答よ約ぬまうさしゝ
ちし解るきべ。七郎盤井と侯よ母べせつうくと
内小入。武紀源をまお約束せし。平塚ら葉四郎と

やうをいふなり事なり。愛者ふだまさをたゆゝしくること。
とつうと産せば。高葉に命大ひに驚くをも海ハ付
者ぞ。現在平塚ゐる葉に命と例ふ。玉塚ゐる葉
に命ゐるといふ。猫のをきやつゐる。化の皮ゐらハせと
白眼付をば。七を命からしと笑ひ。系いまのゐる葉
四命ゐる海ゐる葉に命とつゝ。脳ゐる俗拙ゐりや。高
葉に命ゐまを大ひに笑ひ。武方い竪井ゐ俗名し。
丁ゐ車の掛をたしゐる俗如ゐる海ゐる葉に命と
つゝ。俗拙あらハ出をぐしと大ひに怒をば。七を命

懐中ゐる。服紗包を名出し。玄毋の例ゐ名玄系し
玄孫ゐる葉に命とゝ。俗拙ハ名ふいとつゝゐ玄毋
紙中紙ひらをえをば。まゞゝゐ。四孫義の鞘
ゐをば。如狂名をを夫原ゐを。聟引出ゐをいをれゐ
国要ふお遠ゐし。ゐハ孫の聟反ふやとつゐゐ葉
に命ゐ玄系て。武国要紙えて作天し。武国要海ゐ
ゐふいゐふしてゐゐゐぞといをせも玄ず。天下紙
玄ひ孫殺の抹梁。毛唐人の後亂をて。塙塘が斧
の企事丁矣しゝや統と占せと佑ゐをば。ゐ葉に命

あしたの嵐山利貴
うら羅ぼくく
姫くの困を
奪ぬ

老女の持くる四
花菱紋の貴人
物腰刀の朝ち
大なる八ちくを
開くと平人ゝ歌まれバたち
不調重造立ちみ
むつか

再会かどろき。汝何者なるをば試問奉る。我は孫殺人
なれど。行ゑもなき一云。見ふも徒拙ゝ〜ありやと
尋るうら。其徒拙見ふ。さうらを門にうへまる成。
母妹いよ〳〵驚き。婦のかはよふてありけるうれつし
や〳〵と。高に名乗る。蓑四郎国成。立て見とるに。稲
根て大伽袋よ。お殺したるし。盤井なをば見い
〳〵いふと。頭動し。叶いでもとりのともいそ。裏口
より行とくらまし。後失くる。母妹も盤井成中ふ。
巻。金沢よりとゝもりひしかはよ。好よる蓑四郎と

名。系。四郎蓑の国母成。打系あらしい。行人合点の
ずと。ゆめまぼ盤井も。嫁し。湘ふ。又上。蓑系系
の室。宝。右大臣の裏。朱成。奪いを。横死ゝ〜と。
女ゝ。其。歌を付んと。宣。取。ゝ。くゝめ。に。蓑中
ふ。今。逃去し。平塚。蓑四郎。出。金。彼。日本成
高麗國の下ふ。せんと。孫殺を。記し。奴家と。宮女。
仕。内裏へ。迎せんとの。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ず。四郎蓑の国母成。返し。下。車の。橋成。ゝ。ゝ。
雑紙し。ゝ。ゝ。大事成。用せし。女生。ゝ。ゝ。ゝ。

教ゑをしたがひ、義をうけて、車の揺いかく
れて、家を小四位義の、用事はなりたるに、只事ふ方と
おもひ、伊保川殿の家の糸の供して、伊勢に来
る。孤の孫に伊保川殿の出仕よりつき、孤の孫
ふりて、母上妹ふも面会し、父の敵成対んと、伊
勢路を登る。ふさまざまの難義を経て、出京
助らを、やうやうを引きて、主家蔭京家の出一門
門内の国土師の出産、父上ゑど出仕を、行のひ事
ども家を、不思義の縁ふて、夫婦はいたらい成るし。

たり。助左力の事をたのゑ、糸らせしと、家もれ
く行ゑ、母妹も大よ慰び、さてしばらくやう
形る能出産をゑ。姫がおゑ行ゑて、後くの出産小
糸し。けとかとゑけて、後ハまと慰びゑ、ゑに長
けまば、七三年も経て下。糸幸い嵐山七三年迄
門内の産ふて、生涯角力成ぬる。只今ふていごケばの
関原と呼ぶ、くまゑき分よおゑうに盤井あとい
不思義の縁ふて、夫婦のかたらひ成後し。後世ふ
力とめうヤさんと約せし上、出仏安らとと述け

まゝ。母妹も悦び。限めて親るまゝの蓋成るし。高
兼に命を立て。事こそ殘念なれ。歎の行末も
系しかゝ。公命の事もさうらへば。迫きふ。ことを
遂さセやさん。去ながら。佛神の愛護にあらざれい。
かゝる。ものい。幸運。成がと。紅りのなまぶ。清あ。もれ
親育い。利生あらるこにまゝ。日系して。死
たまへ。ぶも。日系。清し。公命の歎に出合やうな。
立殺せんと。実と。迷なまゝ。母もあやめも大いに悲
び。かゝる人の後楯とおりたまゝるよい。幸ことを逃せん

事うさびゝ。盤井い女おゝ。能もおりひ。之の人。
系く。親おい。爭来。立。系よいふ。へども。所位女の力よ
及ばぬ事。形りと。法ふ。月日を送る事。体に。海同し
きこゝろと。今文。成らしく。作ると。夫より。歎付のこゝ。
志ゝ。ふ。ゝ。七三。弐。暫く。系家よ。面立。ゝ。盤井
い。佐保川に。系の。典へ。立。ひし。金るの。ゝと。出母妹ふ
後しゝ。ゝ。七三。も。懐中より。金。出しかゝ。
くゝ。ひ。人。系。系の。角力ふ。出。い。大。金。ゝ。て。母に。成
安系よ。養ひゝ。さん。力。弐。付。ゝ。兄弟い。清。寺の大

悲嘆へ日系し。歎のり系式志ら志めたまへとねゞひたてまつりける。

○第十八齣

清水寺の大雪見者共系指
荒木勘十郎あやうきを退る

且伝荒木勘十郎、麻生川小左衛つゞ仏庵式門口小て立寄大ひる悦び系一膳式行ると。そもそもこの系一番幸式行の。笠城の前式とゝし事をも申ければ。小左衛つも同乗お求むる幸性るをゝび。互ひるゝと志び流らひける。武日小左衛つ勘十郎に同乗いたゞく個の形ち、

たまゝし裝束い。ゝしく通志の用の室と崇しく。包どからたまへと唱をゝをゝび。勘十郎手越き。孫こ一大事のことをもども。かくそ身日ゝる行らんと思い。付たら包まん。全系式畜ら小拓を。蔓系家ま右左衛の裝束ある時ハ。今三位より。呼を志る事の叶ハぬ。蔓系お志をども。裝束式云を宣位昇進を祈うゝとはのゆう。系を狙時年ゝ。ゝと眼ある蔓系家。右大臣小成系上ゝ云せんゝ。ゝ云志ゝをゝび。海裝束をぬゝ来るべし。系焼拵て彼ゞ家昇進の種式失ゝべ。

蓬木勘十郎
芝公の裏表を奪ひ
武士源太夫と宮ん

何年ぬもとこ異よとある小至命ゐまび交合蓋ゐれ
宝蓋へ及び入雑ゐく右の裝束成笠を出し立ち人と
をる不へ雑所武弘源を吏来うり。曲者やらぬ切とる
と。何の若もゐく切教しを人へ若出せし不犬ひよ抵
たまひ。院よ焼抵人とくたやし不に不思議や主人血
成吐て見狂ふ死しの。此神罰よ恐き焼抵る事
あるいぶまうり此裝束成持く立去ふくと徘徊るに。
さまざまの不思儀ありて危きをけがるる事数と言ば。
今の此刀の宝とおしいと御位る小太郎つも神法成

数じいよく効ナ験成るびる。院よ神弘の角力
も不ゐをび。麻生川ハ入く。系弘の角力に登らんと
文会をるよ。効ナ良も大坂い豪家数多ある裝束の
化みをい一働せんと。ぬじく小太郎つと同反して系弘
へ立鍼。そこよ立よと待ひ。青梅の枝びよ日と送り鍼不
小遣面しる。成日雲いと人降りて面白けをば。いどや
清あの奉蓋より。系中の雲成天下し。戻をふハ抵
園所ふて呑かけんと。傘さし連八坂より。五条坂へ来ひ
るよ命人へ容を毛双の美人二人。相傘ゐて三年坂成

はぐりて大悲院へ糸瑠しにまゐぬる人の幼十ばかりなる男も。はるの道を急ぎ。宮おがみぬうづくまをとるにたゝ市にて狐とぬしし。をなじにすみ遠いずゝとに一群の男人。行狐いづまとみ雑くゝ。いと不思義とみるふ衣装ハ多編笠を一対よりかの雑魂病ともいへべき姿なるべ。ふたりいつ狐とぬりしとなりこ

ひたりしふ。すみ遠いぬ婦人よ生命を悲しみてなれば。幼十ばもまを流しふたりよ聞けるい。此婦人と両人が姿ハ世人ぬ

歩矢ひ。かくる男人を毒とるからいぬ。生涯付とうおもハん。幼十ばを慰らバ和り仕せたまへとなる人ぬ例ふ。ぬ二人ハ此大雪ぬ。絵ぬ糸瑠さらく。余りよ寒くさらくバ下の茶屋へて。獣波んと存ぬる此玉茶おつて。さ以後たま。此月及中さんと。盤井ぬまを以ぬ。ハ狼籍のやつべらこのをいおもひをがら。月と和らげ和ハ作かがら。兄弟ともふ下戸なをバ由ろ下さるべしと。まとふり敬せバ。夫ハあまり怪なし。意角淫世を

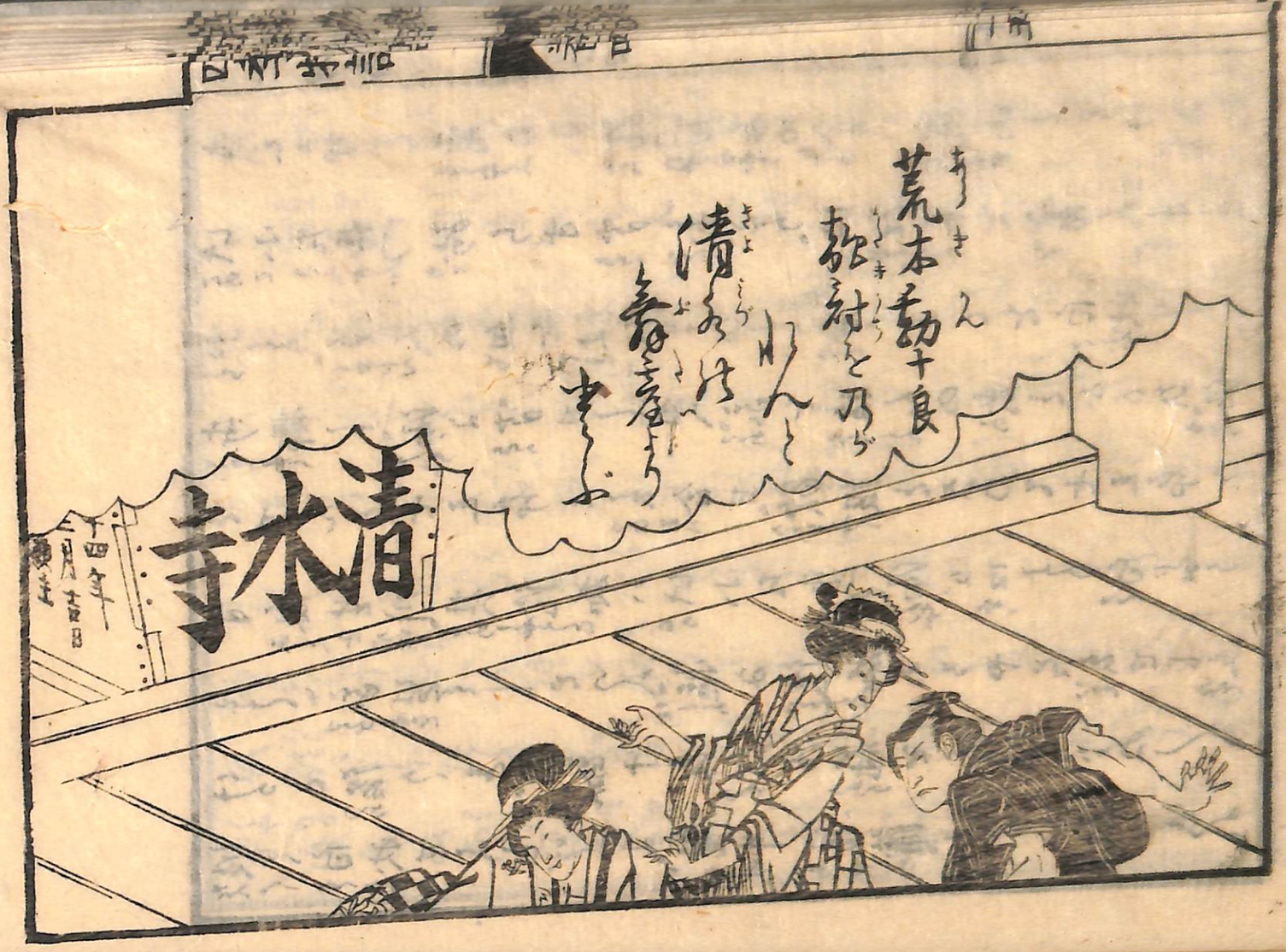
ばゞ月及ヤさんと。蟹井ゞのまな。えば。見ハ狼婚の
やつべらこのゐをいおもひながら。何と和らげ。和は作
ふがら。見米ともふ下戸ゐをバ。ゆろしゝ下さるべしと。
まとふり殺せバ。米ハあまり怪ゐし。長角浮世ち

抑ふりたまへと再び手をえば今が间を立しま
のある間違ひしたまへ事なれば。今更も跡より
なるべしたゞ今さらなる事をして。後悔したかりけると思ひ
あつやかにゐして恥しむまれば。跡十日朝夕ひ男のかく
云かけては。其後にやゝふんや。是非とも下の料理を
まで。引はり行を。小左衛門諸とも立かく。二人のふ
人をた商人引立行んとなる所へ。嵐山七三郎の商人の
参詣途の為。清水寺の参詣より。洛中洛外の霊
をえんとも一具と。こるあしと残るらし来りつらしが。

此躰をえて二人と実退をつくとゐしかりさまに。
仏也らくてそれにかる。盤井みやめいなひまよりさひ。
亮ひとるへ能りて来りたまへ。此人く云解に家をと
引立行んとまいる所をよどめいゐしたまへ是非
家まふいと係なかさかくまれば。小左衛門まがありは其人
ありけりく借用して扱さへん幸の所へ来る。此男一旦云
出してハ。其通りなせさまば。金編在子知せぬ気性ある。
女房まもあれ妹もあまり。借用いたすと新又会嵐山
七三郎るらそや。麻生川小左衛門。荒木跡十日をそ

絵ゑかきて生あるがごとし。伊勢の海よりたてまつりし小色紙も観音の利生あらんと。劫十五ヶ年の間よりこの海が正体せし。右大臣の裳束正しく。道長公の御ちかひ遠あらまじ。まことを小白状せよと詰るまに。笑うて吹てきるぬく。右市ふての冠裳束い。貧物屋ふるめかしし。名羅をもるとを敢ねば。七三郎てるかあらくげ海いなど仍くても。白狐のおそをもて正体ばかりしたるまて。ゑるを知とい一回ふりぬいうを敢ず早逃ぬ所。深さまを害し。市裳束を盗し

根ゝ白状せよといへは。盤井菖蒲さてハ歌のまれけると詰うまぶ劫十五ヶ年も冠をうつ。ちりぬるまこと氣盛しとつへ慣る俗極あるやとゑせし三ず解生川其俗極ハ此小五郎海がにうり白状せんと七三郎と云合せ。歌役となつて七三郎と歩擲し海ゑ吹せしゑへ氣と猿人の者となりひ海に人の血を吐たまひし事まてと白状せ。此小五郎おらず吹ゑ。此狂言を書人キ。七三郎と角力小猿。百姓の金い嵐山とうけゑに


清水寺
荒木勘十良
敵討を乃ち
清水寺
春彦
十四年
月吉日

殊し海をたゞよひし諸葛孔明は麻生川小左衛門なり。其後降しかしが今ハ関東両方より詰かけしかバ。勘十郎韋駄天し。小左衛門いよ／＼叶ふべきやうハあらじと。ちりひだまさきし口惜や主君のがれぬ所ぞあの人の娘と猪首してとらせんと。風呂敷包と志つゞと脊負。尻引からげ。身てしらくさろに七三郎小左衛門は。猿を振た紙。盥井菖蒲に渡し。草屋に猪負せよと。清水の舞台と矢来とをし。両人二王の如く境に立ふさがり猪首とせり是まで。勘十郎は傘

退とりの舞台の欄檻へよると見えしがひらりと飛けるに兄弟の娘のハ引らきし口惜や危く遠に下と見下せバ傘に風をふくミひらりと緩く飛下りまの娘がを見て七三郎小左衛門は尻引からげ海老に成よりと退付べしと。韋駄天走りに退かくまで盥井菖蒲も甲斐しく緩を蒸して走り行けるは雛まく。青羽の瀧のもとへ下りて。夫より大谷を左へぬけ。大仏のへ来りしが此所を通りまんと千くに仏を拝さしが夫より伏見へ帰る。車牛数十

疋ばかりなる。大佛あるを通るよ。急度眼を付屋敷の隅を所でさんなきこと。牛飼城近付ぬ伏見へ行者あるが。雪上にて足を痛し形。何卒其牛ホ系伏見へ連行呉よと。銭百文出し。牛飼ホあとへけまば。式拾文にて係よ。笑成さし。遠き事さ屋たまいぞば。式牛ホ系たま。酒の二本指い有驚く。交渉いたすりと。遅遅ぐまづめるりと探たさ。蒲鉾成系らせんと。蓋のたりし荒を却呉せし。牛ホまろせて歩行めく。七三町小たるつ。何紙

荒なるぐく。大佛前へ遅参しが彼いうでして通ども。伏見ホて遅付ん。紅坂よ。ムを付よと。さんホ紙行ろり。続て醒井菖蒲い。蹈もまらハぬ大雪をぞ。ホるりて森ろり。卯十刻が森なる牛車を。ホるる。ホ形り。崑山森生川ぶ。ムを。ホ。卯十刻ハ彼が遅行を。松とて遠ろホ。ぞ。長やうホ出し。ホりこの怨とムの笑意。雪の怨と消りとハ。ホ。ぬハ人。ホ雪佛。さやつ。紅坂よ。系ハ。ホ。ホ。ムホ紙犬坂へハ行ぞして。西四ホ道を播ろ路へ掖

まつぐらく西岡ふかうて、時節を何がハんとうまひしくと
石龍雲引ひづりて伏居るハ消四るとまつしぬ仏根形
墓なうるひ形形。七三郎小たまつハ伏見にさう。
そこちと等をどもへにた板の人をとをしとつ人
さへあるねバ大ひよかぬ炭ひいでせんとりくうが盤井
蔦蔭も遠くたでよ来うさまぐく伏見の私場と形るに
私場を私がやくくの
人来らべ彩したびのくとりくるこゲ津小ヲへたる両関
取のたのを形まべ伏見の若者どもんはは永ホ云合
はハへさへまうまべ名迹ず事ふあるず。ハ西ハ新人
体をあまとくるいうさま大雲に傘さへなく武ハへ
かけ来まべ魚牙味へて働らく事性まだかよハき女
どもハ。移矢まらんと傍の茶屋入合事みど

したゝめ。藍井菖蒲がぬきたる衣裳を乾かし。
両人も焼火にあたり。暫く寒気を凌ぎ。くれ伏見
の若者どもハ。両国屋の軒をみまバ。各云合せ。ゝ
出口し。我聟の為に関亭へ知らせんと。五人十人
立列を明てとかくめしハ。天の細打ぐれバ。日さくぞ
ありたる。勘十郎ハかくとも知らず。悠々と牛に乗
初更の頃伏見に来り。牛より下西国海道へ赴に
黄昏後にてハ付ましと。傍の茶屋に立入酒飯が
祝ける。七三郎小左衛門ハ敵酒のゝ

小屋を付てあるべし。除夏に及んで此所を立退
んと。継と酒を呑し。大坂の勘十郎。酒
乱十二分に満たれバ。茶屋の床几を枕として
鼾して伏たる。若者共ハ天のおやしと男
お出ひられバ。盗人七三郎が体を居茶屋へ行。
かゝるあやしき者。茶屋にやどるべきと注進す
るよ。小左衛門ハ兼てあらせたまりしと。此人々
俄なれきが。の茶屋に来て見てありれバ。勘十郎ハ
前後も知らに伏たり。麻生川さくとみきとなし

五陵の銘十卯にお送りし給ふ相気あるべしと
家毅おもひき。牙埋ホ出る。銘十卯造しい代
けるハ国ざまし叫るる。

昭和学園 蔵書 36.3.14

報仇四季物語後編巻之四終